

第7回多摩川流域歴史セミナー

『多摩川下流域の中近世史』
～午後の部：講演 望月一樹 氏～

－開催報告－



『多摩川50景』 六郷 多摩川緑地

平成30年7月14日（土）
多摩川流域懇談会



講演『多摩川下流域の中近世史』

講演：望月一樹氏

■はじめに

多摩川は、どこからを下流及び上流、中流と言うか、先生方によって異なる部分もあるかと思いますが、本日お話しする下流域というのは、基本的には、多摩川が上流から流れてきまして、台地・丘陵を抜けて沖積低地に入ったあたりからであると思えます。今の行政区画で、東京の稲城市あたりを抜けて川崎市に入ってくるところからを下流域とし、中でも右岸の川崎市を中心に、中近世はどんな状況だったのか、多摩川の流路がどうなっていたのかということを読み解いていきたいと思えます。

かつての多摩川の下流域は、台地を抜けてきた地点から、大雨が降れば氾濫するような場所で、過去数千年にわたって洪水を繰り返し、そのたびごとに今の土地が形成されてきました。

一方で、このような沖積低地では、洪水が起きれば荒地になりますが、長年にわたり上流から運んできた土、礫等が堆積する中で、微生物などが入り込んで、比較的栄養分の高い土地が形成されてきたということも、この低地の大きな一つの特徴になっていると思えます。

このような土地のため、近世の川崎あたりでは、稲毛米といって、大変良質なお米がとれたと言われていたのですが、実際にはどうだったのか、史料を紹介しながら見ていきたいと思えます。

■荘園の成立

(1) 稲毛荘

まずその手がかりとして、川崎市内にあった荘園を見ていきたいと思えます。その荘園の名前は、稲毛荘と言います。東国では、荘園の史料というのは少ないのですが、この稲毛荘に関しましては、現在、数点の関連する史料が残っております。

荘園は、地元の有力な人が、自分たちの土地を守るため、税金を免れるためなどに中央の有力な貴族等に寄進をする形で荘園として成立する場合や、中

央の有力な貴族や寺院が自分から開墾して荘園として成立させる場合もありますが、川崎の稲毛荘の場合は、地元の土地を中央の有力な貴族に寄進をされて成立した荘園とされています。

(2) 稲毛荘の伝領



稲毛荘の伝領状況

それがわかる史料が、現在天理大学附属図書館にある「皇嘉門院処分状」という史料になります。皇嘉門院は、崇徳上皇の後で、摂政関白を当時務めていた藤原忠通という、中央界では絶対的権力を持っていた貴族の娘ということになります。その皇嘉門院が甥の九条良通という人間に、自分の持っている所領（所有している土地）を譲り渡すときの譲渡状で、私はこういう土地を持っていますということを書き上げた記録になっています。

稲毛荘は本荘と新荘という2つの地域に分かれているのですが、これを皇嘉門院が所有をしていたということがこの史料からわかります。

史料には、稲毛の横に「船木田」と書かれています。これは船木田荘と言いまして、現在の八王子に存在した荘園で、この多摩川流域史から言えば、両荘園とも多摩川の流域の中に存在していた荘園と言えることができます。

さて、この史料から、確実に皇嘉門院が所領を持っており、良通にそれを譲り渡したということが分かります。これがどのように伝領されたかということ、おそらく忠通に最初寄進されたものが娘の皇嘉門院聖子に渡り、その後、自分の弟の松殿基房に譲られて、再び皇嘉門院聖子に戻ってきたと考えられています。それを九条良通に譲ったのが、紹介した史料

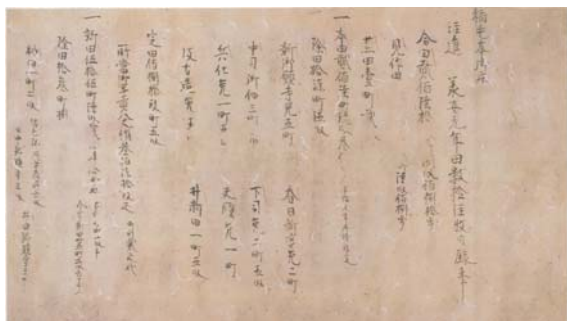


になります。

先ほど稲毛荘は本荘と新荘の2つの地域があるという話をしましたが、この後、本荘は比叡山の大乗院に、有名な『愚管抄』という随筆を書いた慈円という天台宗のお坊さんに譲られます。一方、新荘のほうは宜秋門藤原任子に渡ります。その後は、九条家、一条家に伝わっていくことが後の史料からわかっています。そして稲毛荘は武蔵国にありました。

(3) 稲毛荘の実態

では、武蔵国のどこにあったのかというのがわかるのが、次の「稲毛荘検注目録」と呼ばれる史料になります。これは現在宮内庁が所蔵している史料になります。



稲毛荘検注目録（複製） 市民ミュージアム蔵

史料の最後のほうに、除田ということで、稲毛荘の中で年貢を免除される水田が記されています。それが全部で13町あるのですが、そのうちの1種類として神田、神様の水田として1町余りが記されています。その神様がどこに祀られているかと言うと、稲毛郷と小田中郷と井田郷という3カ所の地名が書かれています。稲毛という地名は、残念ながら今は残っていませんが、小田中というのは、現在の中原区に上小田中、下小田中という地名があります。また、井田も同様に、中原区に井田という地名があります。まさに中原区の当該付近にこの稲毛荘が存在したことが、この地名からわかります。

この史料は承安元年(1171年)に土地の調査をした際の記録、近世で言えば検地帳に近いものですが、稲毛荘には水田が263町8反180歩存在したという

ことが記されております。その内訳は、現作田、実際に耕作をしている水田が262町6反180歩、荒田、荒れてしまった状態で耕作していない水田が1町2反という形で記されています。1町2反というのは全体の数%にしかなく、ほとんどが承安元年時点で耕作をしている土地でした。全国に存在した荘園では、全体の水田の2~3割ぐらゐは荒田という扱いになっているのが多いのですが、この稲毛荘に限っては、わずかに数%しか荒田になっていません。それほど、この稲毛荘の土地は非常に肥沃な土地であったということが言えるでしょう。

その水田、約263町の内訳をさらに見ますと、本田と新田という形に分けられております。本田というのは、承安元年から12年前の平治元年に、同じように稲毛荘の土地の調査を行ったときに定められた水田で、面積は206町6反300歩あります。

一方、新田は、平治元年以降承安元年に至るまでに新たに開発された水田で、55町6反240歩の面積があります。

さらに、その新田の内訳を見ますと、古作と今年新田、つまり承安元年分の新田ということで数字が出ています。古作で20町余り、今年の新田で35町とあり、平治元年から承安元年の前年1170年まで、約10年の間に、開発された土地よりも、後1年余りで開発された土地のほうが圧倒的に面積は大きく、恐らく大規模な開発がこの時点でされたのではないかというふうな推測が成り立ちます。土地が肥沃であるからこそ、開発が進んだのではないかと考えられるのではないかと思います。

この12年ほどの間で、全体の田地の面積263町余りの2割強が開発されているところが、この稲毛荘の大きな特徴になっています。ただ、土地が肥沃だからといって、水田を耕して米をつくるには、土地だけではなく、水も必要になります。そうした視点で見ますと、本田の内の除田、年貢免除の水田が17町余りありますが、その中でも「井料田」という名目が出てきます。これは恐らく用水路の管理に充て



るための水田で、その収穫をもって用水路を管理したのであろう。この管理費用としての水田が1町5反余り存在したということから、灌漑施設もこの時点で整備されていたという推測が成り立つのではないかと思います。

この下流域は沖積低地として、沖積低地の一つの大きな特徴としては、土地が肥沃であるというところでした。その一つの証左が、12世紀段階でこの多摩川下流域にあった稲毛荘という荘園です。大きな水田面積を持って開発も積極的に進め、灌漑施設も持った土地の存在は、その土地がそうした耕作に非常に適して肥沃であったということの裏づけにもなるのではないかと考えています。

この荘園は、井田や上小田中という地名から現在の小杉周辺にあると言いましたが、灌漑用水としてどこから水を得ていたのでしょうか。簡単に考えると、やはり多摩川から水を引いていたという推測が成り立つかと思えます。上小田中のほうが多摩川に近く、井田の方は遠く、さらに少し土地が低くなっていく形ですので、井田から小田中へ水を引くというのは難しかったと思えます。水は高いところから低いところに流れますから、小田中から井田へ水を引くとなりますと、多摩川の存在が一つ注目される場所かと思えます。

また、この地名で今では残っていないものに稲毛郷があります。この稲毛郷が一体どこだったのか、ここは稲毛荘という荘園で、その中に稲毛郷がある。荘園名と郷名が全く同じですので、ほかの小田中や井田に比べれば、稲毛荘の中では一番の中心的地域であったのではないかと考えられます。同じように除田として免除されている土地も、稲毛郷が一番大きいので、この稲毛郷の位置がわかると少し全体像も見えてくるのではないかと思います。

では、検注目録の中でヒントになるものはないかと見ますと、本田の除田の中に、新御願寺という寺院の経営費として5町の水田が免除されています。その他には春日新宮いままやの経営費として2町の水田が免

除されており、この稲毛荘には、新御願寺と呼ばれる寺と春日新宮と呼ばれる社が存在したということがわかります。恐らくこれは荘園を鎮守する意味合いもあるでしょうから、一番の中心地に存在したであろうということが推測できるのではないのでしょうか。

では、その新宮、新御願寺は、一体どこに所在したのか。現在、中原区には宮内という地域があります。そこに春日神社という神社がありまして、同じ境内地の中に、常楽寺という寺院が現在も存在しております。

江戸時代の宮内村の絵図でも、川崎街道に沿ったところに、春日神社と常楽寺が描かれており、現在も、場所を全く同じにしてこの2つが並んでいることがわかります。



春日神社の鰐口（複製） 市民ミュージアム蔵

そのうちの春日神社に鰐口という史料が残っております。鰐口は寺院や神社の向拝ごはいの軒のところに吊り下げられているもので、これをゴンゴンと鳴らして参拝します。この鰐口は現在神奈川県指定文化財になっています。応永10年、室町期の1403年につくられたという銘文が刻まれています。銘文の中には「武蔵立華郡稲毛本庄春日御宮」ともあります。このことから、現在の春日神社は少なくとも15世紀の初頭段階には存在し、遡れば、この稲毛荘の春日新宮に通じるのではないかと考えられます。

一方、常楽寺にも平安時代の聖観音が現在も安置されています。これは川崎市の指定文化財になって



いるのですが、そうした文化財の遺存状況から見ても、この常楽寺が、記録に出てくる新御願寺と捉えても差し支えないのではないかと考えています。そう考えますと、稲毛郷という地域は、現在の中原区宮内であったのではないかと思います。

この宮内地域というのは、多摩川に比べると少し土地が高くなっているため、多摩川が氾濫しても、さほど大きな影響はなかったのではないかと思います。そうすると、そのあたりが稲毛郷、稲毛荘の中心地で、かつ多摩川の際にあるということ。この稲毛荘の土地開発に関しては、この多摩川という存在が一つ大きな影響を与えていたのではないかと捉えて差し支えないかと思います。どこかに取水口なりを設けて、荘内の灌漑施設をつくっていたのではないかと推測として成り立ちます。

これが12世紀の史料です。その後、13、14世紀になると、この川崎あたりも史料が非常に限られ、今回の多摩川に関する史料というのはほとんど皆無になりますが、16世紀になってくると、また史料があらわれてきます。ここからは、多摩川の流路の変遷に着目して史料を確認していきたいと思います。

■多摩川の流路

次の史料が「おだわらしゅうしりょうやくちょう小田原衆所領役帳」と呼ばれている史料になります。小田原に本拠地を持った戦国大名の北条氏にかかわる史料です。制作された年代がはっきりしているわけではありませんが、この写本史料の中に、作成日として永禄2年という年の記述があり、この史料の原本は永禄2年からそう遠くない年に成立したものだろうと思われています。

この史料の特徴は、太田豊後守という北条家の家臣が、当時の当主だった北条氏康の命によって、家臣たちにいろいろなふしん普請役を割り当てるために、その家臣団がどこに領地をどれだけ持っているかということ把握するため作成した帳簿です。

そこには戦国大名小田原北条氏の家臣団の人たちの名前と一緒に、所領地でどのくらいの収入があったか、水田の面積というよりも、金額で何貫文とい

うような形で収入が書かれています。

ここで多摩川だけに限って見た場合に、注目される郷村名が3つあります。それがどこかと言いますと、1つは六郷・大師河原、1地域として併記されています。それから駒井登戸、駒井宿河原です。

六郷・大師河原、注記は江戸になっています。これは江戸城の支配領域と捉えていいかと思います。それから駒井登戸は多波川北、駒井宿河原は江戸と記されています。ここに注記された地名をそれぞれ一つ一つ追いかけていくと、多摩川が一つの境界であったことがわかります。多摩川右岸側は小机だったり稲毛だったり、左岸側が江戸だったり多波川北というふうな表記で分かれています。

六郷・大師河原、江戸を見ますと、川崎も実は江戸と書かれています。今、地図上で見ますと、当然、川崎は多摩川の右岸になりますから、この注記で言えば必然的に小机ないし稲毛であってしかるべきところが江戸になっているのです。それから六郷・大師河原、川崎大師のある地域ですが、そこも江戸になっています。

これをどう考えるかという、六郷・大師河原が一地域だったということは、この多摩川は現在の流れよりも大分南を流れていたということがうかがい知ることができます。では、どの辺まで南を流れていたのかということですが、川崎区に小田という地域があります。大師よりももう少し南にあるのですが、この小田の注記は稲毛になっていますので、小田までは多摩川は南には下がっていなかったということです。ただし大師河原、確実にそのあたりは多摩川が流れて、江戸に、すなわち左岸に含まれていたということがわかるかと思います。

一方、駒井登戸や駒井宿河原、この駒井というのは、今の小田急線の駅にもありますし、東京の市の名前になっている狛江のことだと思いますので、狛江と登戸がくっついており、狛江と宿河原がくっついています。登戸は今多摩川の南にあるはずなのに、ここでは多摩川の北に書かれていますので、この当時、



多摩川は大分南を流れていたと考えることができるのではないかと思います。

このように多摩川は、現在とは大分流れを変えており、登戸・宿河原では南を流れて、丸子地域では北を流れて、川崎地域では北を流れている。特に河口域のところは非常に流れが変わっていたことを、うかがい知ることができるのではないかと思います。

また、どの時点で、また時代かはわかりませんが、今の鶴見川と多摩川は河口を1つにしていたとおっしゃる方もいらっしゃいます。それは中世より古い話だと思いますが、そのあたりまで多摩川は氾濫源として持っていて、一番の河口あたりについては、一度雨が降ると一挙に流路が変わってしまうこともあったのではないかと思います。

上丸子のところで、もう一つ同じ北条氏の関係で流路についてうかがい知ることができる史料が1点ありますので、それを紹介しておきます。

これは天正18年(1590年)3月16日に発給されました北条氏の朱印状になります。天正18年という、あと数カ月で秀吉によって北条氏は滅ぼされますが、その直前に発給されているものです。現在の中原区にあります日枝神社が所蔵している史料なのですが、読みますと「上丸子郷之内、近年川成ニ付而、世田ヶ谷領沼目之郷与問答候、依之去年己丑九月、興津加賀・中田加賀・安藤代福田三人之検使を以、被為見候処ニ、於上丸子者無紛由申上候間」云々と書かれております。

すなわち、近年川成^{かわなり}についてということで、恐らく多摩川が氾濫することによって新たに土地が生まれ、その土地をめぐる上丸子郷と対岸の沼目郷、これは今の下沼部のことだと思いますが、対岸同士の郷で、土地争いが起き、北条氏が家臣を派遣して実地調査をしたところ、上丸子の主張を認め、耕作した土地はちゃんと年貢を払うようにしなさいということが書かれています。

つまり、この天正18年時点で多摩川は氾濫を起こして、どちらかに流れを変えることによって新たな

土地を生んで、対岸の郷同士でその土地をめぐる争ったということを見てとることができます。



江戸時代の下沼部村絵図 市民ミュージアム蔵

江戸時代の下沼部村の絵図では、オレンジ色で太く、「江戸道」と書かれている部分が現在の中原街道になります。下にグレーで、細長い線で描かれているのが多摩川になります。下が右岸(川崎側)、上が左岸(東京側)となっており、渡し場で中原街道は多摩川を渡るという形になります。

これは何を示している絵図かというと、多摩川を挟んで右岸に黄色い土地が描かれています。実は江戸時代は、ここは下沼部村の土地だったということを示しています。つまり多摩川は、かつて南を流れていましたが、北上して村を分断する形で1つ土地をつくってしまったということが推測されるのです。こういう地域を飛んだ土地、「飛地^{とびち}」という言い方をしますが、川成^{かわなり}ということで、今までなかった川の対岸に自分の土地ができた。当然これまでの多摩川を一つの基準で考えれば、ここは上丸子と言ってもおかしくはないのですが、それに似たようなことがこの天正18年に起きたわけです。



明和2年に描かれた多摩川流域絵図 市民ミュージアム蔵



こういうところは多摩川流域にはたくさんあります。明和2年、18世紀の半ばに、多摩川とその両岸の村名が書かれた絵図があるのですが、下丸子村と鶴木村の間ぐらいには「上平間飛地」というのがあったりします。上平間というのは、実際は川崎側にあり、左岸に飛地が存在しているのです。同じように、矢口の飛地が右岸にあり、古市場の飛地も右岸にあるような形で、それぞれ両岸に飛地があります。飛地があるということは、いずれかの時点で多摩川が流路を変えて、土地が飛んでしまったということになりますから、いかに蛇行しながら多摩川が流れていたのかがわかると思います。これは昔の絵図だけに限らず、現在の地図でも両岸に同じ地名がたくさん残っています。それをチェックしながら眺めていくと、多摩川の蛇行の状況を見てとることができるのではないかと思います。

このように多摩川というのは、肥沃な土地である一方、一度氾濫すれば当然のごとく暴れ川になります。このため、両岸地域では洪水が起きると、こうした氾濫した所では飛地が生じ、その結果土地をめぐって争いが起こっていました。中世期では北条氏の朱印状しか残っていませんが、近世になりますと、たくさん絵図からつくられて、記録が残っています。大田区側の史料も川崎側の史料もたくさんあり、それらを一つ一つ拾っていくと、多摩川の流路をうかがい知ることができると思います。

もう少し流路を知る手がかりがないかということで、川崎には神奈川県内では現存する最古の灌漑用水である、二ヶ領用水が流れています。この二ヶ領用水に注目する形でも多摩川の流路を考えてみるので、後半は二ヶ領用水についてお話を進めていきます。

■二ヶ領用水の開削

二ヶ領用水も、中世から近世の過渡期の段階に開削された用水路と言えるかと思います。先ほどもお話ししましたように、天正18年に小田原の北条氏が秀吉によって滅ぼされます。その後、関東に來たの

が徳川家康で、大大名ですから、たくさんの家臣団を引き連れています。家臣団には給料を支払わなければいけないため、土地を与えて、その年貢を給料として与えます。そのために、家康は関東に入ると同時に土地の調査をします。天正18年から19年ぐらいにかけて、各地で初期の検地帳は結構残っていますが、その一方で、多くの家臣団を不満なく自分に仕えさせるために、土地を大きくすることで、土地調査とともに土地の拡大ということも一生懸命行うようになります。

関東は、利根川、荒川、多摩川があり、大氾濫すれば、あっという間に洪水になって被害が出ますから、その河川をいかに治め、いかに利用するかということが、家康にとっては重要なテーマであったと思います。特に利水、いかに川を利用するかということで、当時代官だった小泉次大夫という人物は、この多摩川の水を利用して、灌漑用水として水田を広げましょうという建言をし、それが家康に認められてつくられたのが、この二ヶ領用水と言えます。

ちなみに、二ヶ領というのは、稲毛領、川崎領、2つの領と呼ばれているエリアを流れている用水になりますので、二ヶ領用水という呼び方をしています。右岸では二ヶ領用水になりますが、一方で左岸、東京側でも灌漑工事をしています。それが六郷用水と呼ばれて、今でも一部見ることができるのですが、世田谷領と六郷領という2つのエリアを流れた用水です。そちらは六郷用水という名称なのですが、合わせると4つの領を流れていたというので、「四ヶ領用水」などという総合的な言い方をされる場合もあります。

二ヶ領用水は中原区あたりまでですと、取水口からずっと今でも環境用水路として保存されていますので、川崎市民には親しまれている用水路として実際に見ることができます。

二ヶ領用水の工事が始まったのは慶長2年です。1597年に用水工事のための測量と杭打ちが始まります。その後、2年後から本掘の工事が始まり、約



10年して、主要な用水路が完成します。それは本堀と呼ばれている基幹用水路になりますから、そこから枝分かれして、各水田に水を分ける小堀を掘っていく必要があります。その小堀の開削が翌年から始まって、最終的には慶長16年に二ヶ領用水は完成しました。約14年ほどの年月をかけましてこの用水路が完成することになります。

その後、用水の維持管理ということで、18世紀になりますと田中休愚という人が大規模な改修工事を行ったりしていますが、今日の話からはそれですので、まず二ヶ領用水の全般的なところを見ていただければと思います。



明治初期の二ヶ領用水絵図 市民ミュージアム蔵

明治期に描かれた概念図ですが、右が江戸内湾、今の東京湾になります。左が上流ということで、上部を流れているのが多摩川になります。東海道や中原街道や大山街道の道が赤で描かれています。用水路は、多摩川2カ所から取水をしまして、ほぼ川崎全域に網の目状に用水が行き渡っているというところがこの絵図から見てとることができると思います。人体にたとえれば、血管のように地域に用水路がめぐらされていたと言えるのではないかと思います。



上記絵図のトレース図

二ヶ領用水は、全部で60の村を灌漑しました。江戸の後期19世紀段階に入りまして、大体2,000町歩ほどの水田がこれによって潤されたということが記録として残っています。村名のところが、グレーがかかっている地域が川崎領、白抜きになっているのが稲毛領で、大体今の幸区鹿島田あたりが境だったと捉えていただければと思います。

慶長2年から慶長16年にかけて工事が始まるわけですが、18世紀の後半に記された「しんようすいほりきだめのこと新用水堀定之事」という史料が残されており、おおよその工事概要のことがわかります。

慶長2年から測量と杭打ちを行うのですが、その期間は慶長2年の2月3日から翌年の12月5日までの間の602日間だとわかります。小泉次大夫の工事は興味深くて、六郷用水のほうで工事をしていると、二ヶ領用水はお休みです。六郷用水が、一通り工事が終わると、今度は川崎側に移って二ヶ領用水の工事が始まるということで、両岸で交代で工事をしていたようです。その工事日数を見ますと、六郷用水は測量・杭打ちで198日間。一方、二ヶ領用水は404日間かかっていることが史料からわかります。測量・杭打ちで二ヶ領用水は非常に時間がかかっていました。

続いて、慶長4年から本堀工事が始まるのですが、10年6カ月間、3,582日間かけて両方交代に開削工事を進めて、六郷用水では全体で工事区間を24区に分けまして、1,892日間行っています。一方、二ヶ領用水は21区に分けて1,690日間ということで、開削工事は六郷用水のほう時間がかかっています。慶長10年からの小堀の開削、これは交互ではなく、約300日ぐらいで、右岸と左岸で一貫して工事を行って終了し、慶長16年に竣工しています。

測量・杭打ちあるいは本堀工事、このあたりの日数は、どういうふう理解をすればいいかということですが、二ヶ領は確実に測量・杭打ちには時間がかかっているのですが、開削工事では時間はかかっていません。今の地形的に見ても、六郷用水の取水



口というのは現在の世田谷区の和泉と呼ばれている地域、ちょうど二ヶ領用水の2つの取水口の中央あたりの対岸に取水口が設けられているのですが、そこから割と台地の縁を流れるように来て、ときには台地を開削しながら流れています。

一方で二ヶ領用水のほうは、沖積低地をただ流れていきます。川崎区と多摩区の間の傾斜角度は、2、3度程度で、ほぼ平坦です。高低差をはかれないと用水はうまく流れませんから、おそらくその測量に二ヶ領用水は若干時間がかかったのではないかと思います。

では、開削工事はどのようにして短く済んだかという、本堀の中でもメインとなって使う堀の開削に当たっては、過去、多摩川が氾濫をして流路を幾つか変えていく中の旧流路をうまく利用しながら、二ヶ領用水の堀を掘っていったのではないかと考えることができるかと思います。恐らく全く何もないところから掘っていくと、測量も開削にも時間がかかるのではないかと思います。六郷と違って二ヶ領は、現在の多摩区あたりから一挙に低地に入りますので、比較的旧の多摩川の氾濫でできた流れを利用しながら工事をしたことで、若干六郷用水よりも短い期間で済んだと考えられます。

二ヶ領用水が流れている用水路というのは、かつての多摩川の流路をうまく利用してつくられているため、その用水路の流れをみることで、以前の多摩川の流れを見つけることも可能になってくるのではないかと考えて二ヶ領用水を紹介しました。

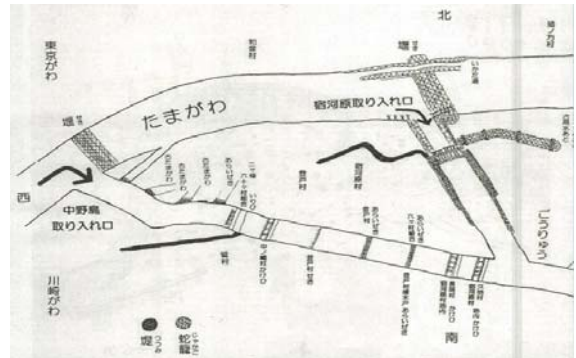
二ヶ領用水が流れている本堀と呼ばれている地域の字名などを見ますと、古川という字名が結構残っていました。多摩川は、流れを変えますとそれ以前の川は古川と呼んで、流れが変わった後は新川という呼び方をしていたみたいで、絵図などでよくそのような表記が出てきます。流れが変わったからといって全く川がなくなったわけではないでしょうし、名残が幾らか残っており、そういったものを二ヶ領では利用したのではないかと思います。

先ほどの小田原の所領役帳から見た多摩川の流れ、それと、それから数十年、40年近くたった後の小泉次大夫の二ヶ領用水の水路から見る流れを見ますと、その間に、おそらく多摩川はまた北へ流れを少し変えていたと推測できます。

なお二ヶ領用水も、現状は近代以降改修工事が行われて、昔の流れがそのまま残っているわけではありません。もっと蛇行していたものが直線的な用水路につけかえられたため、本来は今ある姿ではありませんでした。



江戸時代の二ヶ領用水取水口 市民ミュージアム蔵



現在の二ヶ領用水取水口

同じように、二ヶ領の用水をどこから引いていたかという、取水口が江戸時代は2つありまして、現在の中野島と宿河原から水を引いていたと言われていますし、現在も同様に取水が行われています。

では、開削当初から2カ所だったのかどうかというと、当初の史料がありませんので、はっきりしたことはわかりませんが、現在の見解の中では、大きくは3つに分かれております。それを最後に紹介します。

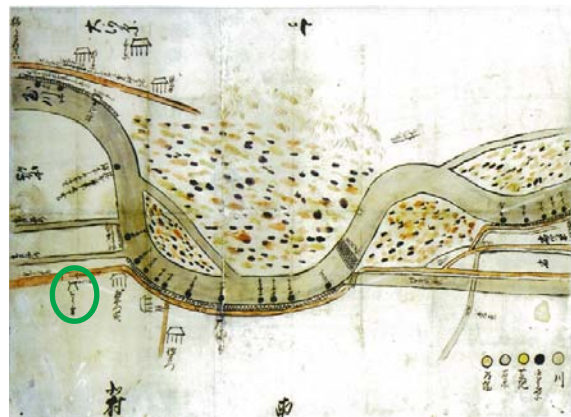
当初は、中野島に1カ所しかなかったものが寛永6



年に宿河原に新しく取水口ができて、2カ所になったという説。それから、最初は宿河原だった、ところがその後、多摩区の菅というところに取水口が設けられて、その取水口が現在の中野島にまた移ったという説。さらには、もともと宿河原にも中野島にも取水口はなくて、現在の高津区の久地に取水口があったが、水量を確保するために、中野島に新たに取水口が設けられ、久地の取水口も寛永年間に宿河原に移ったという説。大きくこの3説がよく言われているところです。

どれが正解なのかはわかりませんが、注目すべきところは、取水口が移るといところが大きなポイントになると思います。新しく設けるといことではなくて、もともとあったところから移る、特に菅から中野島に移るなど、割と近所で取水口が移っています。明らかに何かしらの理由で移ったと思いますが、その一つの理由としては、例えば多摩川が氾濫したことで過去の取水口が機能しなくなったので、新たにつくらなければならないということもあり得ると思います。

記録に残された二ヶ領用水もある時点での用水の姿であって、これが江戸時代ずっと通して、あるいは開削から現在に至るまでずっと通して今の姿ではなかったと思います。多摩川のいろいろな流路の変化等によって取水口も大きく変わっていたのだろうという推測は、十分言えるかと思えます。



18世紀に描かれた宿河原駅付近の多摩川 個人蔵
(緑で囲んだ部分が八幡宮)

それを一つ証左するものとして、別の絵図を紹介したいと思います。これは現在の南武線の宿河原の駅のそばですが、川崎市の緑化センターという施設がありまして、そこに八幡下^{いりひ}樋という二ヶ領用水の施設がありました。そのあたりを描いた絵図です。描かれた時代は、多分18世紀後半ぐらいだと考えられます。ここを蛇行して流れているのが多摩川です。右側に1本、水路があります。ここが二ヶ領用水の宿河原の取水口になっています。

この後、多摩川はまた流れを北へ変えることになるようです。現在、絵図の取水口のそばが緑化センターと呼ばれているところで、この多摩川の際を現在南武線が走っていると捉えていただければと思います。絵図の左側に八幡宮があるのですが、この八幡宮は現在の八幡神社になります。



現在の宿河原駅付近の多摩川
(緑ポイントが八幡神社)

この絵図を今の地図と合わせてみます。神社は大きく動かないと思いますので、ほぼ同じ位置だと考えてください。現在の多摩川の流れを見ると、この絵図の後、多摩川はぐっと北へ流れを変えたようです。流れを変えれば、当然のごとく取水口も移動しないと水は取れません。その移動をするに当たってどうしたかという、現在の宿河原の取水口からの流れが、絵図の多摩川の流れと合致しますので、多摩川がぐっと北へ上がった時点で、取水口を多摩川へ延長するために、南を流れていた時代の多摩川の



古い流路を利用して、そのまま新たに北側に取水口をつくったと地図上で見てとることができます。

開削をして新たに取水口をつくるのではなく、多摩川の流路をうまく利用して取水口を延長して、今あるような形の場所に取水口ができ上がってきたことが、この絵図と現代の地図を比較すると、見てとることが可能ではないかと思えます。

こうした利用方法を考えれば、二ヶ領用水開削時点では、当然のごとく多摩川のかつての流れを利用して普請されたのだらうと思えます。かつての多摩川の流れも、二ヶ領用水の流れと重なり合わせることで、16世紀末以前の多摩川の一つの流路を知る手がかりにもなるのではないかと思えます。

■おわりに

大河川の流域に当たっては、今ある姿は現時点での姿であって、以前とは全然姿が変わっていることは、今回幾つか挙げた史料の中からも知ることができるかと思えます。

多摩川沖積低地、こうした下流域は、先ほど見た稲毛荘の荘園の実態のように、比較的肥沃な土地で耕作にも適しており、美味しいお米もとれていたと思えます。

稲毛荘は、税を中央の貴族に納めていましたが、お米ではなく、絹で納めていました。八丈絹という絹織物で税を納めておりました。恐らく当時12世紀段階で、この川崎の稲毛荘のあたりは養蚕も盛んだったと思われまふ。それを証明する史料、実は稲毛荘の中で強盗事件がありまして、それを領主である撰関家に報告した報告書が残っているのですが、その中に^{まぶし}蔭（蚕が5齢になって、最後、繭をつくる時に入る部屋）が何百枚盗まれたということが書かれています。このことから、恐らく養蚕が盛んだったのだらうと思えます。川崎から京都までお米を持っていくのは大変なので、軽い絹で領主に年貢を納めていたのだと思えます。

多摩川下流域は、肥沃な土地であった一面もあれ

ば、土木技術が未発達である中近世では、少しの雨でも各地で氾濫が生じたのではないかと思えます。

下流域においては多摩川の水というのは、農耕社会の中では非常に恵みの水であった反面、氾濫をいかに治めて水を確保するかという大きな課題もあり、苦労が多かったのではないかと思えます。

注) 本講演で使用した画像は、川崎市市民ミュージアムが刊行した図録『「つわもの」どもの光と影 -稲毛三郎とその時代-』及び『二ヶ領用水物語』から転載、引用した。



質疑応答・意見交換

■質疑応答

【神谷】意見・質問・感想をたくさんいただきましたので、主だった質問、意見についてお話ししていけたらと思います。まず、質問の部分で簡単なものだけ先に望月先生の方からお答えいただきたいと思います。

【参加者】下流域が肥沃な土地だったとはどういうことでしょうか。

【望月】土壌が非常にいい、あるいは水はけがいいというようなところで、「肥沃」というような言葉を使わせていただきました。

【参加者】「新御願寺」の「新」とは何でしょうか。

【望月】これについては正直、はっきりしたことはわからないというのが実情かと思います。新たに免除されたので「新」なのかというご質問なのですが、そうではなくて、恐らく春日新宮のほうも「新」がついていると思いますが、先ほど荘園の領主の話で、藤原忠通、九条家が所領として持っていたと説明しました。藤原氏の氏神は奈良の春日大社になりますので、領主の氏神を勧請してつくったのが春日新宮だろうと思います。ただ、お寺に関しては、はっきりしたことがわからないというのが現状かと思います。

【参加者】現在の多摩川の流れはいつ確定したのでしょうか。

【望月】近代以降、大きく流れが変わったということはないかと思います。改修工事が始まってからちょうど多摩川 100 年ということですが、多摩川の改修工以降は大きな変化はありません。下野毛ですとか上野毛、あるいは下丸子や上丸子、等々力というのが世田谷にあって川崎にもあるということですが、明治 45 年に東京府と神奈川県が府県境が多摩川の中央にということで定められましたので、それ以降、両側に地名が残っているということです。それ以前は川崎の等々力緑地も、正確には、東京府荏原郡等々力村の一部という形だったのが、明治 45 年になりまして神奈川県に編入されたということに

なりました。

【参加者】二ヶ領用水の取水口の変更は、人口増加等で年貢の関係上、米の増産で水量を確保するために実施したのでしょうか。

【望月】基本的には、江戸中期以降は 2 つの取水口が存在したのだろうと。それ以前が、1 つあったのか 2 つあったのかというところで諸説の紹介をさせていただきました。その中には、水量確保ということもあり、1 つの取水口では当然ながら水が不足することから 2 つ設けたという説もありました。設置目的としては、安定した水量確保ということがあったと思いますが、取水口の変更というのは、1 つには多摩川の流路の変更、流路が変わるというところが一番大きい理由ではないかと思います。

【参加者】近くに大丸用水、三沢川等がありますが、取入口に関してどのような調整があったのでしょうか。

【望月】60 の村々、2,000 町歩の水田を二ヶ領用水で潤したというお話はしましたが、その 2,000 町歩が 60 カ村の全ての水田だったわけではありません。各村の大体 9 割は二ヶ領用水を使っているところが多いのですが、残りは小河川の水を使う等しております。当然二ヶ領用水も、大丸用水の流れの末を少し利用したりとか、あるいは多摩川の支流である、三沢川を利用したり、あるいは登戸あたりでは五反田川を利用したり、一部合流させながら水量を増加させているということはあるかと思いますが、取水口との調整というのは、史料としては余り残っていません。水路の絵図等を見ますと、利用していることは間違いないと思います。

【神谷】日野用水や、さらに上流のものも含めて多摩川全体でいろいろ有機的に用水が絡んでいるという話があるかと思いますが、そのあたりはいかかなのでしょうか。

【望月】二ヶ領だけに限って言えば、二ヶ領の上流は、稲城市から取水しております大丸用水が存在しまして、それが川崎の多摩区の菅あたりまで流れて



きて、そこでの用水として利用はしています。川崎でも必ずしも全部が二ヶ領用水ということではなく、大丸も利用した地域もあり、またその流れの末を引き込んで水量を増しているというところははっきりしていると思いますが、そこから上になりますと、また別の話になるかと思えます。

【参加者】 多摩川からの二ヶ領用水を鶴見川に落とそうと思った理由は何でしょうか。この2つの川の間の下流域の分水嶺はどこなのでしょう、最も低いところが悪水路なのでしょう。

【望月】 鶴見川に落とされた部分については、分水嶺というのは非常に難しいと思います。低地ですので、どこでどっちへ両側に分かれるというのはなかなか言い切れません。二ヶ領用水も本堀は、今、久地にある円筒分水という設備で、下流域は4本の用水路に流れておりまして、一番太いものが川崎堀と呼ばれている堀です。これが現在私たちが目にする二ヶ領用水と呼ばれている堀になります。

それが鹿島田に来ますと、町田堀と大師堀という2つに分かれて、町田堀が鶴見区のほうへ流れていくという水路になります。結局、各村を通して当然水も汚れますので、悪水堀という形で、最後は川ですとか海に落とすわけなのですけれども、鶴見川に落とされたのは、恐らく町田堀の流れの最末端として落とされたと捉えることができるのではないかと思います。

【参加者】 多摩川の旧の流れを活用して二ヶ領用水が作られたそうですが、高津区では、平瀬川が古代から流れていたの、この流れを活用し、二ヶ領用水につなげたことも伺えるのでしょうか。

【望月】 平瀬川については、二ヶ領用水として利用したというところは、はっきりはわかりません。津田山というぼっこりした山が高津区にあるのですけれども、平瀬川はその津田山の内陸部を本来流れて、それが現在の溝の口のほうへ流れていました。二ヶ領用水の川崎堀自体は、津田山の多摩川寄りのほうを流れています。平瀬川沿いの谷戸の水田は平瀬川

で取水をして耕していたと思うのですけれども、二ヶ領用水自体は、中野島と宿河原で取水したものは現在の南武線の久地駅の裏で合流をしまして、そのまま少し下流に行きますと現在の円筒分水、昔の分量樋に分かれて、先ほどお話ししました4本の用水路に分かれるものですので、地理的に言っても平瀬川を利用したということはないかと思えます。

【神谷】 上流の話が出ましたので、望月さんのお話を受けて、小野さんの方から意見をいただけますでしょうか。

【小野】

本日の望月さんのお話は、流域に肥沃な水田が広がること、流域の変遷がたびたびあったことにつきまして、具体的な史料に基づいて鮮やかに説明していただき、非常に興味深かったと思います。

私の関心から言えば稲毛荘の開発のことなのですが、先ほど二ヶ領用水のお話の中で、旧流路を活用して用水にしたというお話があったかと思いますが、もしかしたら稲毛荘もそんな形での開発というのが発端だったのではないかと思います。多摩川の流路が変わって、そのときに新たに残った部分を水田開発する、そんなイメージがあるのでしょうか。もしそうであれば、先ほどご質問にあった新御願寺、春日新宮というのは、想像ですが、「新」、これは「いま」とも読みますけど、勧請したという意味です。そうなれば、元の御願寺が多摩川に流されて、春日宮も流されて、残ったところに勧請し直して、再開発したときに新御願寺、春日新宮、再開発としての稲毛荘が成立したなどというストーリーも考えられるのかなと思ったところです。

もう一つ興味深い話は、飛地の問題です。両岸同一地名の上限はどこになるのか、一番上流はどこかと思ったときに、これは府中のあたりではないかと思えます。押立ですとか常久があり、あるいは戦国期の文書で中河原という場所が関戸領になっていますので、これは明らかに多摩川の右岸ということに



なります。そうすると、流路の変遷でどれが一番上流は府中界限ではないかと思えます。

望月さんが冒頭でおっしゃった、下流域はどこからか。沖積低地に入って流路が変遷するところから下流域ではないかということでしたが、下流域というのは府中から下かなと思えました。府中のあたりは中流域だと思っていたのですが、そういう意味だと下流と定義するのも可能かと、新しいことを思いつくきっかけになりましたので感謝しております。

【参加者】「稲毛」という地名は千葉県の稲毛と関係があるのでしょうか。

【望月】 はっきりした地名の由来というのは難しいですが、千葉の稲毛とは離して考えていただければと思います。非常に水田が多くて、お米がとれた、そうした稲から来ている地名なのだろうと思います。

また、稲毛三郎重成が領したから稲毛荘だという話があります。稲毛三郎自身は、もともとは小山田三郎重成で小山田氏の一族になりますので、もしかすると、どこかの時点で稲毛荘に入り込む形で稲毛の土地の名前を名乗るようになったのかもしれませんが。稲毛荘は重成以前に成立していますので、稲毛重成が開発したから稲毛荘ではないということは確実かと思えます。

【神谷】 新田開発というか開発領主、そういう人たちが土地に入った際の、名前の由来と土地の名前の関係について、小野さんに補足していただけますか。

【小野】 場所によっては、士族名が地名になったという現象もあると思いますが、基本的にはあり得ないと思います。新たに開発に入って、その地名を士族名で名乗るといのがほぼ全てだというふうに思いますので、稲毛荘を開発して稲毛氏を名乗ったということなのでしょう。

【参加者】 他にも下流域で「多波川」の名前使われている例はあるのでしょうか。また、図中で玉川とありますが、多摩川としたのはいつ頃でしょうか。

【小野】 近世の「武蔵名所図絵」で多波が出てきたと思います。それから、経塚で発掘された経筒の銘

で多波という銘があったと思いますので、中近世までは多摩川、多波川、両方共存していたというふうには考えられます。ただ、一番古い史料の所見では、「万葉集」の東歌に大麻川と出てきますので、非常に古い段階で既に「タマガワ」というふうには呼ばれていたことは間違いないです。

その語源については、「玉」だと思います。多摩の地域を流れていたから多摩川というふうには言ったとは考えられないと思えて、最初に玉川があったと言えます。その理由は、全国に多摩という地名は少ないと思いますが、玉川という川の名前は、江戸時代以降「六玉川」と呼ばれているように全国にあり、「常陸風土記」の中にも、古代の川として玉川が出てきますので、玉川というのは玉のように美しい川、あるいは玉石のように美しい河原石がいっぱいある川という意味で、自然につけられた名前だと思います。そこから多波川になったり多摩郡という地名がつけられたのではないかと思います。

【神谷】 玉川はいつ頃から使われたのでしょうか。江戸時代は間違いなく玉川だと思いますが。

【小野】 もっと古く、「万葉集」は大麻川ですけど、郡名として多磨郡というのは、国府、国分寺で出てくる出土の瓦でも使われています。さらに、その中には「玉」という字を1文字だけ書いたものもありますから、それは明らかに玉郡ということをやという漢字で表しており、玉も奈良時代からあったことは間違いないと思っています。

【参加者】 下流の大きな流路変化は洪水のたびに起きたのでしょうか。それは数十年に1回くらいでしょうか。

【望月】 流路変化は、基本的には洪水による流路変化だと思います。大雨等によって氾濫するということだと思います。ただ、それがどのぐらいのスパンで行われていたかというのは、文献が残っていません。恐らくボーリング調査等の地質調査をすれば、何かしらの痕跡を見ることもできるのかもしれませんが。川崎駅前のアゼリアという地下街をつくるとき



に地質の調査をしているのですが、そこでも確かに泥状のものが入り込んで、その上にまた砂状のものが入り込んでいるという層は見てとれていますが、はっきりそれが氾濫源の痕であるところまでは、明確になっていなかったのではないかと思います。

ただ、コンクリートで堤防をつくっていたわけでもない、ある意味、自然堤防の中を自由に多摩川が動いていたというように捉えていただいたほうがいいかと思います。

【参加者】 氾濫する多摩川の周りに住むメリットは何でしょうか。水の近くに住むメリットが氾濫するデメリットを上回っているのでしょうか。

【神谷】 災害としての多摩川ということで、視点が変わっても構いませんが、こういったことに対しどう考えていったらいいのか、小田先生にご意見を頂ければと思います。

【小田】 現在、広島あたりで大災害が出ています。瀬戸内海はほとんど花崗岩という石が本体になっており、花崗岩は、よく御影石と言って、磨くとお墓の石に使われます。しかし雨水に当たって何万年とか何千年たつと砂に溶けてしまいます。花崗岩は、周りが溶けると、中にちょっと石が核のように残っています。テレビではコアストーンと言っていますが、それが出てきたので、みんな家が吹き飛ばしてしまったわけです。砂だけだったら家は吹き飛ばしません。

各地域の地盤や地質によって、洪水の程度が変化するのはです。では関東、この辺多摩川はどうかというと、多摩川とか武蔵野台地、川崎とか多摩丘陵とか横浜あたりには、そういう岩石が基盤にありません。ローム層と言いまして、富士山や浅間山で大爆発した火山灰が積もっているのです。その火山灰は大体4つぐらいの地層に分かれていまして、一番古いのが多摩ローム、それから下末吉ローム、武蔵野ロームと立川ローム、と4つに分かれています。

洪水が多摩川でどういうふうにあったかという話

になると、ロームは風で飛んできて積もったわけですから、丘陵の崖とか台地の崖で水の影響を見つけるのは、下に礫層がないため、なかなか難しいのです。

最近わかってきたのは、今から大体5万年ぐらい前に多摩川が大氾濫を起こしているということです。その洪水の源は、今の東村山から青梅のほうで、そのときに上流の石を運んだんですね。小さな豆粒みたいな石です。それが武蔵野台地の5万年前の地層に流れています。当然多摩川にも落ちたのでしょうけど、台地の上にあり、そのころはこの地域では人間の生活ができなかったという環境がありました。

それが、どの程度の時代になってくると多摩川が安定するのかというと、そういうデータもないのです。先ほど多摩川の上流・下流をどこで境にするかといって、小野先生は府中あたりより海側が下流で、山側が上流だとお話いただきましたが、地質学的には当たっているのです。府中からずっと火山灰の地層、特に一番新しい立川ローム、今から3~4万年前の地層をずっと追っていくと、大田区あたりでは何十メートル下が昔の地表だったのです。だから、何十メートルも火山灰の上に黒土がたまっていたわけです。それが、本日お話した低地の氾濫源という肥沃な土。それより下は火山灰で、人間の生活ができないような肥沃ではない土です。

大田区あたりの旧石器時代の地表はどこかということ、100メートルぐらい下に地表面があるのです。東京湾も、あんな水などなく、溪谷だったのです。東京溪谷と言いまして、ずっと横須賀のあたりまで急流が流れる溪谷でした。それがいつごろ今のような状態になるかというのはまだ研究段階です。

多摩川の最初の大洪水は、4万年前、5万年前で、その後に洪水があった事実は、調布の明治大学の校舎をつくる時に発掘した大体2万年ぐらい前の地層からわかります。今から2万前というと氷河時代で、そのころにかなり大雨があつて、調布の遺跡などはみんな流されています。遺物が洪水で磨滅して



いるのです。

以上のように多摩川は先史時代以来、何回も何回も洪水があったということが地質学的にも認められています。

■まとめ

【神谷】 本日は利水の話を中心にお話いただきましたが、多摩川の治水、これからの水防についてどう考えるかについても今回は触れていきたいと思いません。改めて、望月先生、小野さんに、それぞれ多摩川の防災という観点から本日の話を振り返って、ご意見いただければと思います。

【望月】 治水ということで、本日の話の中では具体的に説明することはできなかったのですが、当然江戸時代も治水に対しての関心は非常に強く、その時代時代で工事は行われました。その中で川崎では、田中休愚という人物が非常に治水技術を持っていた人物でして、後に大岡忠相に登用されます。酒匂川の治水工事により洪水をなくした功績で幕府に登用されたのですが、田中休愚は多摩川でも治水工事を行っております。

当時、川が蛇行するという事は、どこかに一回衝撃で流れが当たって、それが横に曲がっていくため、衝撃が当たったところが、水があふれやすくなっており、その反射を受けたところも水が流れやすくなっていました。田中休愚はこれを見て、川の流れを変えるために、瀬替えという形で、蛇行しているところを切り、直線的に川が流れるような工事を実施したといわれています。

そうした形での治水ということは、江戸時代においても盛んに行われていた部分であると思います。堤防についても記録としては、笹ですとか松の木ですとかを何本、どう購入してという仕様書みたいなものは残っているのですが、それを具体的にどう組んだかというのはわかっていません。

【小野】 防災・治水という面から、先ほどのご質問を受けて言えば、水辺に住む意義は、水田耕作のた

めの利水と飲料水のための水だと思います。7割のメリットがあれば、3割のデメリットを持っていてもそうせざるを得ないのだろーと思います。

洪水の回数というか頻度というような話題も出ましたが、府中の場合、1980年に市史編纂室のほうでつくった「府中市歴史年表」という、詳細な史料に基づいた年表があるのですが、近世で洪水の被害と書かれている年代は、7~8回あったと思いません。近代以降に府中市域で洪水の被害があったというふうにされている年は、明治23年と43年と大正2年と3年、その4回です。その被害の大小についてはわからないのですが、それ以後、全くなくなります。

今年は、多摩川治水百年ということで、全く国交省様々ということで、大正7年以降、市域では被害がないということもありまして、全く防水に対する意識は薄れているというのが現状だと思います。地域の高齢の方と話す機会が多いのですが、現在80代、90代の方でも、洪水の被害に遭った方はいらっしゃいません。大水で水田が浸かってしまったということは何回もあると言っています。ただ、台風が来る時期は秋なので、稲が実っており、実ったときに水に浸かっても、水が引けば稲刈りができます。畑は被害を受けますけど、水が来るところには畑はつくらず、少し高いところにつくればいいし、逆に大水が出ると、魚がいっぱい庭にも水田にも来て、夜のおかずには困らなかったという話しかありません。記憶の中では、全く洪水被害というのは100年以上ないということです。

ただし、府中市で公表されたハザードマップを見ると、大きな範囲が赤く塗られていますので、今回の西日本の豪雨災害のことも、いつ起きても不思議ではないというようなことを歴史的にも学んでいきたいと思いました。

【望月】 府中から下流のほうでは、昭和49年に、台風が来て和泉多摩川のところが決壊をして、家が何棟も流された被害がありましたが、あれは二ヶ領用



水を引き込むための宿河原のコンクリートの堰により、多摩川が迂回しまして岸边の家を全て流してしまったのです。実はあの堤防をつくったのは平賀栄治という技術者で、彼は多摩川の治水改修工事の責任者でした。

多摩川治水 100 年という中での位置づけとしては、平賀栄治の仕事というのは非常に大きくて、今現状で水害がなくなったというのは、平賀が昭和 10 年代から工事をした一つの大きな功績なのかなと思います。それが逆に洪水を起こしてしまったということで、当時、平賀栄治は非常に非難されたのですが、彼はそれに対して一つ一つ全て証左をして、最後には論文を書き切って、自分のやってきたことが間違いないということを世間に認められるようになったのです。

完全な治水というのが、ときにはまた洪水を起こす場合も過去にはあったということで、どういふものを今後考えていかなければいけないのかという一つの教えにもなるのかなと思います。

【参加者】 大正 6 年の高潮はどう評価されるのでしょうか。

【神谷】 多摩川の大改修における 1 つの重要な歴史になりますが、この議論は、また別の機会にさせていただければと思います。

【神谷】 多摩川だけに限らず、昨年のことを思い起こせば、鬼怒川の洪水、破堤の問題がありました。また、九州豪雨に続き、今年は西日本でも豪雨により被害がでました。多摩川にも同じ状況がいつ起きてもおかしくないわけです。そういうことを踏まえて歴史から何をどう学んでということで、本日様々なお話を伺ったわけです。

本当に最後のまとめということで、改めて小田先生にまとめをお願いしようと思います。

【小田】 多摩川というものは、周りに住んでいる人、また多摩川を利用した人、そういう歴史を調べると、低地を利用するというのが多摩川における一つの大きな区切りになると思います。中世より前は自然の

流路で、自然に任せて洪水があったり川の道が変わったり、そういうことを繰り返していたのです。中世になって初めて、人々が用水をつくったり水田稲作に利用したりと利用しはじめました。

そういうことを考えると、先史時代は、多摩川はほとんどが台地の上で、常に水があふれて利用できるような状況ではなかったのです。水田をつくって多摩川の低地を利用しようとしたのは弥生時代なのです。その時代に初めて、東京湾をずっと関西から船で来て、多摩川の河口地域に弥生の大集落をつくりました。大田区の久ヶ原遺跡、これは今から 2000 年前のもので、この人たちが初めて低地に下りて、いつも氾濫する多摩川を開削していくのです。古墳時代に入ると、さらに開削を進めていきます。そして、古墳時代の後に、府中には武蔵国の中心地である国衙こくがができます。

多摩川に面したところに本当に人間がちゃんと定着するようになったのは、本日お話した中世以降なのです。それ以前は、台地の上で野山を駆けめぐって、細々とイノシシをとったり魚をとったりして生活していたわけです。それが荘園や武士団が出てきて、初めて多摩川に国としてのまとまりが出てきたということが本日のお話で、望月先生には本当にいい史料を拝見させてもらったということで、この会の成果があったのではないかと思います。

【神谷】 望月先生はじめ、皆様ありがとうございました。以上で本日のセミナーを終了します。



望月 一樹 氏 プロフィール



- ・ 神奈川県立歴史博物館 学芸部長
- ・ 日本女子大学 非常勤講師

駒澤大学文学部歴史学科卒業 川崎市市民ミュージアム学芸室長、シルク博物館学芸担当課長を経て、平成 30 年 4 月から現職。

専攻は日本古代史、仕事では神奈川県史全般を研究。特にここ数十年は、18 世紀後半に殖産興業家として新田開発や砂糖製造に従事した、池上太郎左衛門幸豊について研究。

【講演者挨拶】

今回は「多摩川下流の中近世史」ということで非常に大きなタイトルを頂いたのですが、川崎市市民ミュージアム勤務時代に多摩川のことを調べたりしたこともありましたので、その時に勉強したことを踏まえながら、お話をさせていただきます。その関係で、下流域でも特に右岸の川崎側の話が中心になることをご了承いただければと思います。



総司会・開会挨拶：神谷 博 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）

西日本における大きな水害を受け、東日本は今回大きな影響はなかったとはいえ、本質的には全く無関係ではなくて、全国どこでもこういう事態は起こり得るのです。そういう中で、何をどうしていけばいいのか、自分たちの住んでいる地域はどういう地域なのか、歴史をひもといて、それを繰り返さないだけではなくて、何をどう考えていったらいいのか、そんなことも歴史から学ぶことの一つではないかと思っています。本日はそういう意味でも、歴史の話ではありますが、現代につながるヒントがたくさん出てくるのではないかと思います。



まとめ：小野 一之 氏（府中郷土の森博物館 館長）

大正 7 年以降、府中市域では被害がないということもありまして、防水に対する意識は薄れています。地域の高齢の方と話す機会が多いのですが、現在 80 代、90 代の方でも、洪水の被害に遭った方はいらっしゃいません。記憶の中では、洪水被害というのは 100 年以上ありません。

しかし府中市で公表されたハザードマップを見ると、大きな範囲が赤く塗られています。今回の西日本の豪雨災害のことも、いつ起きても不思議ではないというようなことを歴史的にも学んでいきたいと思いました。



まとめ：小田 静夫 氏（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）

多摩川に面したところに人間がちゃんと定着するようになったのは、本日お話しした中世以降のことで、それ以前は、台地の上で野山を駆けめぐって、細々とイノシシや魚をとって生活していたわけです。それが荘園や武士団が出てきて、初めて多摩川に国としてのまとまりが出てきたということが本日のお話で、私はあんな細かい荘園の史料など初めて見ましたので、望月先生には本当にいい史料を拝見させてもらいました。



閉会挨拶：澁谷 慎一 氏（国土交通省京浜河川事務所 所長）

多摩川は暴れ川と呼ばれていて、流路を数度変えてきました。大正 7 年に直轄で河川改修した後には、大きい流路の変遷はないわけですが、明治の時期に神奈川県と東京都の県境、都境が定められた後も、川の中では結構水の流れの変化はありまして、現在でも都と県の境を見ると、こんなところに川崎市があるのかなどということを発見することがあり、多摩川の流路の変遷の歴史の一端を感じてもらえると思います。

今年は、「多摩川改修百年」ですが、このようなセミナーなども通じまして、歴史から学んで、今後この多摩川をどういう形で残していくかという市民の皆さんとの議論のきっかけにしていきたいと思っています。

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館等を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

第7回多摩川流域歴史セミナー『多摩川下流域の中近世史』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

